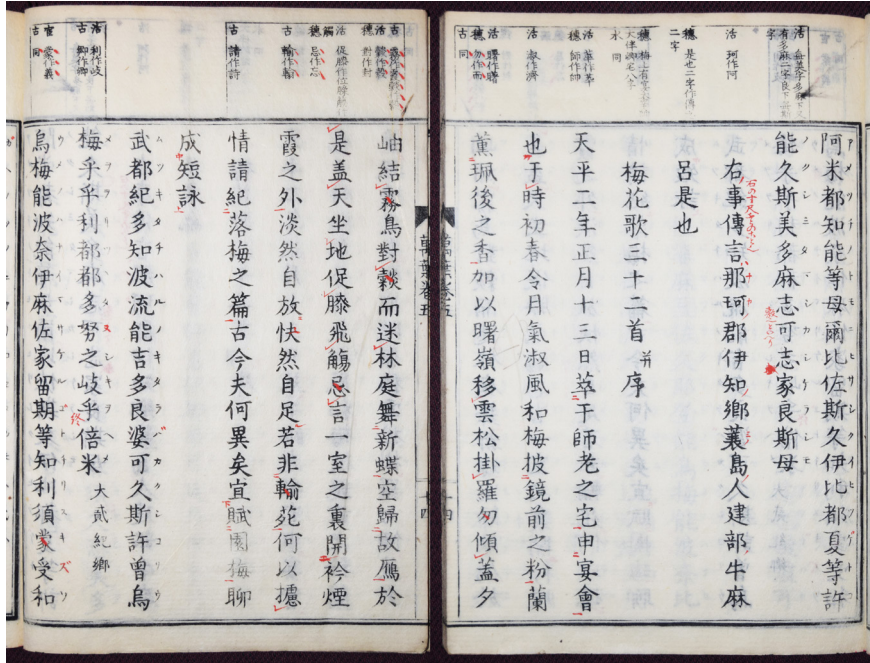


小特集◆日本の元号

「令和」特別編

令和

2019年5月1日
改元



◆ 万葉集 卷第五 20巻20冊の内第5冊 橘(橋本)経亮・藤原(山田)以文[校]
文化2(1805)年刊 [京都]:出雲寺文治郎

新元号に撰ばれた「令和」は、『万葉集』巻第5に収められる「梅花の歌三十二首」序文を典拠とする。

「初春の令月にして、気淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。」

『万葉集』は、全20巻に長短歌4,500首余りを収める和歌集。奈良時代末ごろ、大伴家持によって最終的にまとめられた。

「梅花の歌三十二首」序文は、家持の父、大宰府長官の旅人が天平2(730)年に邸宅で催した宴で詠まれた和歌32首の宴集序である。

「令和」とは、よい季節に穏やかな風がわたる宴会の場の情景を言うが、ひいては世の中が平安であることを意味する。

なお、今回展示する本資料の題簽には『万葉和歌集 校異』とある。

[請求記号 ル 212-2 / 那珂文庫]

【原文】

梅花歌卅二首并序

天平二年正月十三日、葦于帥老之宅、申宴会也。于時、初春令月、氣淑風和。梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香。加以、曙嶺移雲、松掛羅而傾蓋。夕岫結霧、鳥封穀而迷林。庭舞新蝶、空歸故雁。於是、蓋天坐地、促膝飛觴。忘言一室之裏、開粉煙霞之外。淡然自放、快然自足。若非翰苑、何以據情。請紀落梅之篇、古今夫何異矣。宜賦園梅、聊成短詠。

【書き下し文】

梅花の歌三十二首并せて序
天平二年正月十三日、帥老の宅に葦まりて、宴会を申べたり。時に、初春の令月にして、気淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。加以、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封ぢられて林に迷ふ。庭に新蝶舞ひ、空には故雁帰る。

ここに天を蓋にし地を坐にし、膝を促け觴を飛ばす。言を二室の裏に忘れ、粉を煙霞の外に開く。淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。もし翰苑にあらざるは、何を以てか情を據べむ。請はくは落梅の篇を紀せ、古と今と夫れ何か異ならむ。園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。

【現代語訳】

天平二年正月十三日、大宰帥旅人卿の邸宅に集つて、宴会を開く。

折しも、初春の佳い月で、気は良く風は穏やかである。梅は鏡の前の白粉のように白く咲き、蘭は匂い袋のように香っている。それほどではない、夜明けの峰には雲がさしかり、松はその雲の羅をまとい、蓋をさしかけたように見え、夕方の山の頂には霧がかかって、鳥はその霧の穀に封じ込められて林の中に迷っている。庭には今年生れた蝶が舞っており、空には去年の雁が帰って行く。

そこで、天を屋根にして地を席にし、互いに膝を近づけ酒杯をまわす。一室の内では言うことばも忘れるほど楽しくなごやかであり、外の大気に向つては心をくつろがせる。さっぱりとして各自気楽に振舞い、愉快になつて各自満ち足りた思いである。

もし文筆によらないでは、どうしてこの心の中を述べ尽すことができようか。諸君よ、落梅の詩歌を所望したが、昔も今も風流を愛することには変りがないのだ。ここに庭の梅を題として、まずは短歌を作りました。

(小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『万葉集』二(新編日本古典文学全集七、小学館、一九九五年)四〇―四二頁による)

筑波大学附属図書館常設展解説シート「小特集 日本の元号:「令和」特別編」

解説執筆 谷口孝介(附属図書館研究開発室員・人文社会系教授)・山澤 学(附属図書館研究開発室員・人文社会系准教授)
平成31(2019)年4月5日 編集・発行 筑波大学附属図書館研究開発室「附属図書館における貴重資料の保存と公開」プロジェクト